

真 生

第六卷 第七號



□如何なる場合にも、凡てを善意にまで解し得るものは幸福である。そこには限りなき望みと喜びと力とがいつも輝いてゐるからである。

□自分に興へられたる一切を善意に見うる人ならば、其の人の爲めには、失敗も成功の基いとなつてゐるからである。そこに永遠の生命と無限の向上とが輝いてゐる。

□此の意味に於て、一切を善意に解し得る人は、永久に不幸といふものを見ないであらう。何となれば其の人には永久に不幸と云ふものが無いからである。

□そこに限りなき望みと力との生活が永生の光に輝いてゐるからである。いかなる困苦も失敗も、其の人の爲めには何等の妨げともなることができぬからである。

□そこには總てが其の人の爲めと解せられ、自他も一如となり、我他彼此も不二となる。一切は一体となり、不二となつて万事がその人の爲めの向上と轉回して來るからである。

□されば一時の失敗も、やがては再興の糧となり、再び活動の源泉となる。こゝに至つて、失敗必ずしも亦失敗ではなくなつて來るのである。

□古來、誰が初めより失敗ならんや。失敗は成功の基いと知れ。何事も一切を善意にまで解し得ることが大切である。そこには永生の光輝き、無限向上の世界が開かる。

□されば友よ、世は何事も善意にまで持ち來たせ。そこに諸君の前途が輝く。如來の光に養はれて、一切を慈光の中

の生活と見られよかし。

(念)



「偽」ぬれ偽

目次

偽れぬ「偽り」 尅 子
 佛を見る者(一) 土屋観道
 法然上人と教阿彌陀佛 土屋観道
 病窓の便り 安田恢順
 眞生の喜び(二) 小熊啓太郎
 吾朋便り
 唐澤別時三昧會案内

▽蚤一匹でも生命に大小はありません。
 ▽それに蚤や蚊を殺すこと位いなんとも思て居りません、まだ殺したことを手柄にしたり、氣持よがつてゐます、けれど殺される方ではどうせう。私達が一寸刺されたり、喰ひ付かれたりした位でも大聲を立てたり、腹を立てゝゐることを思ふと、少々は思遣らねばならぬと思ひます。
 ▽こんな大人氣ない事を云てゐると嗤ふ人が多いでせうが、私は正氣の沙汰です、なせかと云へば蚊一匹の生命にも思遣るからで、それが直ちに親に酬ひ子を想ふの愛となつて來るからです、如來さまを愛敬する本當の心が無くしては、蚊一匹に對しても振返ることは出來ません、そこに蚊と如來さまとは同じ價値ある對象であるからです。
 ▽總てのものの本質を見ると、そこには必ず生命が充ち溢れてゐます、生命あるところ價値が閃いて居ります、其價値を尊び殺して行かぬところに眞の愛と同情とがあります、だからこれが發しては如來様への信となり、蠅一匹へのもの思遣りとなつて來ます。
 ▽けれど思遣りといふことは蠅一匹も殺さぬといふ事ではないのです、殺す殺さぬといふ以上にそのモノの價値を生かすといふことです、そのモノを本當に生かすが爲めに殺すことも助けることもあるでせう。又私達自身を生かすが爲めに最來さまに歸命し、如來も我も共に助かつてゆく同發菩提心こそ最上の思遣りです。(尅)

□私は原稿を書く時には、部屋から庭から勝手まで片付けて、掃除をして置いてからでなくてはか、れませぬ、随分困つた肝癪だが仕様がありません。
 □佛様のお華が枯れてゐても、淨水の水が換へてなくても氣持が悪いのです、氣持が悪ければ澄んだ強い原稿が書けませぬ。原稿には一切の情況が含まつてゐる寫眞のやうな趣きがあります、だから膝を崩してゐても書けなければ、菓子を喰ひくでも書けませぬ。本當に私には私の原稿を見ると其時々様子が手に取るやうにわかります。
 □茶碗を一つ焼くのも、太刀を一振鍛へるのでも皆そうだらうと思ひます。一本の太刀、一枚の繪にでも無限の世界が即して眺められます、一句一詩一演説にも其人の全人格全生活が匂て居ります。それ位いその作品と其人格とが即して居らなくてはその人の作として價値ないものだらうと思ひます。
 □私達が如來さまを信じてゐる態度も正しくこれです。一舉手一投足の裡に自然にその人の信仰内容が現はれて居ります、それ程私達と如來様との間は不離密接なものです。それを強いて高く信を見せやうとしても益々下卑で虚假の姿が現はれるし、又秘して凡愚を装はふとしてもその高潔な信は自然と外へ顯はれて來ます。
 □これを思ふと私達は決して「偽る」といふことは出來ないものです、「偽り」を隠してゐるつもりでも、隠して居ればその「隠してゐる」といふ姿が外へ現はれてゐて、實は偽つて居らぬことになつてゐます。
 □これを思ふと偽はらうとしても偽れなくなる道理ですが、それを後からく偽て行かうとするのですから本當にケチな淺ましい奴です、願くば如來様のみ前に眞に懺悔して、改まつて行きたいものです。(尅子)

佛を見る者 (一)

土 屋 觀 道

去る三月の十九日丁度夜の十時十五分から、神戸の極樂寺で當山の住職小林上人より、印度佛跡參拜の御話を聞きました。其の時の感想が私には今も尙忘れ難いものがあつて、永へに懐しい感じがするの
で、今そのまゝを茲に筆して見たいと思ふのです。

それについて、少しく前書きを書かしてもらはねばならぬのでありますが、一体私は小さい時から釋尊の人となりをお慕いしてゐる一人でありました。そこで釋尊の御人格や、御生活のことについては可なり昔から知りたがつてゐる一人でしたが、殊に私が佛敎の信仰に入らしては、其の念が一層に強く起つて止みませんでした。従つて身を佛門に歸するやうになりました。其の念が是非釋尊の御跡を一度は參拜をして見たいものだとの祚願に燃えたこともあり、乍然道を求むるに急なると、又佛跡參拜に要する費用の貧しさに妨げられて、其の志を果し得ないこと、に二十余年であります。然に今突然にも私共の先輩、小林上人が道友十一名と佛跡參拜を決行せられたのに接したので私の參拜熱は極度に高潮して來たのであります。茲に於て、せめては心からなる參拜者の氣分にでも觸れたいと、丁度三月上旬に歸朝せられしを幸いとして、其の席を御訪ねしたのであります。此の日は午後の一時から神戸三菱の小林様での道友の集りあり、夜は全生田神社前なる鶴田氏の御宅での信者の

集りがあつたので、私が極樂寺を御訪ねしたのはそれを終つてからのことでした。幸い一人二人のつれは反て話を聞く上にもよいからとて、鶴田様と遠藤様とが一緒になつてくれました。

丁度、其の日は雨降りでしたが、夜になつてからは少々風さへ起つて居りました。十時過ぎてからのこととて既に寺の人たちも床について居られたが、住職一人は先約を守つて、私の行くのを待つていて下さいました。師は印度に旅立つてから足かけ四ヶ月ばかりにもなるのでしたが、少々面やつれのやうにも見えました。反つてそれが寧ろ精進の姿にも見えて尊く拜せられました。而も上人の前には幾多の印度佛跡に關する彼地の著書や寫眞がウヅ高く並べられ、師の面影にはさすがに見て來たばかりの印度の面かげがありくと見えるやうでした。

あの大きなガンヂス河の流れや、ヒマラヤの高原、さては釋尊説法の道場や、釋尊成道の正覺山に至るまで、一として私の胸は高なりせぬものとはありませんでした。聞くところによれば同行の方たちは主として、寺院方が多く其の中にも可なりに口八丁手八丁の布教達も多かつたので、随分とホラの吹き合もあつたのださうですが、さすが釋尊の佛跡に到着した時ばかりは全く其のホラも消ねはて、誰一人純信の心に歸らぬ人とはなかつたと云ふことでした。承はる所によると、一行が初めて、祇園精舎に着いたとき、こゝが釋尊常住の説法の跡と教へられ、一同そこで般若心經を拜讀して、參拜したが此の時ばかりは一行すべてが本心に立歸へり、當時釋尊の昔を思出してはさながら、釋尊の御許に三拜讀經の氣分であつた。其の時の心持ちが初めて、その時に接しなければ味へない味であつたと。私眞に心からなる師の御感想を拜聽して私も亦かつてにない、心からなる讀經の氣分を味はせられた氣分を知りました。

而も、そこには祇園精舎の跡が大いな寫眞として私の前に置いてあつたのでした。さながらに彼地にも行つてゐる私の心知でした。然し精舎の跡は今や昔の面影もない、皆荒れはた一野原に過ぎないのじす。見るからに、一見小高い小さな岡かのやうな氣もしますが、靜にその跡を眺むれば其の佛跡とも見るべき住石や瓦などが、佛堂の跡として思はしむるものがないではありませんでした。

佛を見る者！ 私の心にはどこからともなく、此の言葉が顯はれて來るのを覺えました。

精舎を建てた人は今いづくにどうしてゐるのであらう。乍然それはとに角として、彼かその時に於ける釋尊への志念は今も尙私の學んで以て道とすべきものがある。少くとも彼の當時の心には佛陀への合掌の心あり、道の爲めに財を投ずるの尊さがあつた。財が尊いのではない、その投じた心が佛への合掌として尊いのである。釋尊の當時、生ける人は數多くあつたことだらう。而て、其の中には貧なる人も富んだる人も亦多かつたに相違ない。乍然これらのものも、今日となつては皆一人として生きてゐる人はない。善も惡も、貴も賤も、老若男女も、皆一として此の世のものでない、建てられたる精舎も今はまた斯くの如くである。

乍然、この事實を以て今日を拜しはかるとき、今日の一切が二千五百年の後またこの通りではあるまいか。今日の老若男女、貴賤貧富一として永劫のものではない。それは正しくこの祇園精舎が語つてゐる。

かくて私の心は二千五百年の昔を偲ぶと共に、また今日を二千五百年の後から考へて見たのであつた。そのとき私は私共の周圍に限りなき至幸の光が極もなく輝いてゐるのを見た。二千五百年の昔、其の跡を眺むれば世は皆移り變つて見るかげもなく諸行無常のことばかりを物語らぬものではない、乍然その

中にも今も尙輝いて止まぬものは法燈の輝きである。否少くとも祇園精舎を建てたる須達長者の心の上には法燈の高く輝いてゐるのを見る。言換れば凡そ人とし人と生れしなか、其の人の心の中に永劫つきせぬ如來の慈光を拜むことのできたのはど世に之ほどの幸福の生活があらうか。

四、

さういへば、佛を見たものは須達長者ばかりではなかつた。貧者の一燈としての老母の献燈も亦その一であつた。彼が貧困の中から食を節して、麻油を求め、それを釋尊の爲めにとて燈火をともした。阿闍世王がさ、げた萬の燈火は雨風に消はれても、老母の献燈のみは消はなると云ふ。そこには釋尊を拜むまご、ろがこもつてゐたからであつた。即ち釋尊を拜む心の中にも彼は正しくほんどうの佛を拜んでゐるのであつた。阿闍世の萬燈が消えたのは何に爲めか彼には佛を眞に拜むの信仰がなかつたからだ。否少くともこ、ではそれを示してゐる。そのことはギ婆をして言はしめてゐる、王よあなたは佛に會ふも佛を見ることができない、それは佛そのものへの献燈ではなくして、汝自らにそれを以て誇らんが爲めであると、然し王も亦幸いであつた。彼はこのギ婆の言葉によつて晩年眞に佛に合掌することの道を得たからである。

其他釋尊の當時、釋尊の道を知りて、眞に佛をあこがれ、そして眞に佛を合掌したものは多かつた。心からなる佛への合掌、この合掌の心こそは即ち佛への歸命であり、見佛でなくて何であらう。

心の底から祇園精舎にぬかつて、禮拜合掌の中に念佛した小林上人の心！ 私はそこに師が初めて心からなる純信の見佛を祝福せずには居られない。そしてまた、今更らのやうに、現代人の幸福を此の念佛合掌の中に發見せずにはゐられないものがありました。

念佛の中に佛を見るといへば或る人は笑ふかも知れぬ。乍然、佛に合掌するもの、心の中をよくよく

眺むればそこにたしかに見佛の姿が現はれてゐるではないか、祇園精舎を建てた須達長者の心の中にも貧者老母の獻供の中にも、そこには合掌の佛を見た如く、吾人の心の中から如来への歸命合掌のその中には南無する佛を見てゐることは南無する人に於ての何よりの實証である。

五、

こんな心が私の心の中に、上人の御話を聞きながらあり／＼と思ひ浮ばれて來るのを感じた。何といふ幸福な私たちであらう。釋尊滅后二千五百年、而も私達は今も尙釋尊の當時の如く、釋尊に對して南無合掌することのできることは、かくの如くして、世は移り變つていつかは跡かたもなくなる時が私共に來るだらう、乍然それにしても、今時かうして永劫に輝く如来の靈光に合掌することのできつゝ、あるこの仕合せは百千万年をよし經たとしても、その事實のみはまた氷劫に滅するものではないのである。

私はかうして、感謝し念佛せずには居られなかつた。私の道友も亦此の意味に於て、皆佛を見るものであり、又この意味に於て何より至幸なる人々であらう。

(七、五)

法然上人と教阿彌陀佛

土 屋 觀 道

「之は勅修御傳の第二十卷の一節を現代語に釋して見たものである。其の中に上人の人格が最も平民的に、而も信仰の内容が如何にあるべきかをよくあらはしてゐる。讀者の感想を承らば幸である」

河内の國に天野四郎と云ふ強盜の張本人があつた。人を殺し財をかすむることを仕事として居たが年ふけて後、上人の教へに歸依し、出家して教阿彌陀佛と號してゐた。いづも上人のみもとに行つて教を蒙つていたが、或るとき上人が夜半ひそかに起きて念佛してゐられるかと想はれることがあつた。教阿彌陀佛がしやうに困つたので、上人はやがてやすまれた。ねむりにつかれたやうでその夜もあけた。教阿彌陀佛は心のうちにどうもおかしなことがあるものかと思つたがお尋ねせず、そのまゝにすぎた。彼は其後、ほどへてまた上人を訪ねたが、上人が持佛堂にゐられたので、

そのところへまいつて、

教阿彌陀佛

「御縁が無くて在京もできませんから、相摸の國の河村と申しますところに、知り合のものがあつたよつてまいります。つきましては年もどつてゐることですから、又どお目にかゝることもできません。もとより無智なものですから、むづかしいお話を承りました。たゞも、そのかゝいあらうとも思はれません。たゞ願くば決定して往生のできるやうな御一言を承りまして、一生のおかたみにいたしましたうございませう」

上人

「まづだいいちに、念佛にはおくふかいわけなごど云ふことがない。念佛申すものは必ず往生するのだと知るばかりだ。ごんな智者學者であ

つても、その宗に明かさなわけをばどうして造り出してはれやう。決して夢にも、奥深い義があるだらうなどは思つてはいけない」

「念佛はたやすい行であるけれども、往生する人の少ないのは、そのいはれを知らないからだいつやや誰もあなくて、おまへとわしとたゞ二人でいたときがあつたらう。そのとき夜半にこつそりとわしが起きて念佛してゐたのを御房は聞かれたか。」

教阿彌陀佛

「ね耳にさうではないかと承りました」

上人

「それだよ、ほんどうの決定往生の念佛は。こけとてかざる心で申す念佛が往生せぬのだよ。決定往生をしやうと思ふならば、かざる心なくてまことの心で申せばよい。ごくおさなごや畜生などに對してはかざる心はないが、友達や念佛の同志などは無論のこと、その他、いつもお互になれてゐる妻子眷屬のものであつても、多少ことごらの判るほどの人に對しては、きつと

かざる心がおこるものだ。人の間に住つてゐるからにはその心のない凡夫はあるものでない。「すべて、どんな人でも、人ほど往生の障りとなるものはないよ。それはその人のためにかざる心を通して、そのために、眞の往生をとげないからだ。だといつてひとりでもできず、然ばどうして、人目をかざる心もなくて、ほんどうの心で念佛すべきかといふに、いつも人の中にまじつて、しづまる心もなく、かざる心もあるものは、夜もふけて、見る人もなく、聞く人もないやうなとき、こつそりと起きて、百遍でも千べんでも、多少にか、はらず、心にまかせて申すところの念佛こそは、かざる心もないのだから、御佛の心にも叶ふて、決定往生がとげられるであらう。」

「この意味合がわかつたならば、夜半ばかりに限つたことはない。朝だらうと、晝だらうと、また暮れだらうと、人のさく心配のないところ、いつもこのやうにやればよい。」

「つまるところ、決定往生を願ふ眞の心もちは

丁度、盗人が人のものをぬすもうと思ふ心は、其の奥底にあるけれども、うはべは何ごともない風に見せかけて、そのあやしい風を人に見せないと同じだよ。其の盗み心は人が全く知らぬから、少しもかざらぬ心である。決定往生しやうとする心もまたその通りで人が多く集つてゐるなかでも、念佛申す色を人に見せないで、心に忘れぬが第一じや。其の時の念佛は佛より外は誰かこれを知らうぞ。佛さへ知つてゐますならば往生に何の疑いがあらうぞ」

と仰せられたれば、

教阿彌陀佛

「決定往生の法門こそ心得ました。もうはつきりとわからせて頂きました。この仰せを承りませんでしたなら、こんどの往生はあぶないことでありましたらうに。」

「然し、この仰せのやうでは人のまへで、念珠をくり、口をはたらかすことなどはやるべきことでないでせうか」

上人

「いやそれも亦ちがつてゐる。念佛の本意は常念こそ大切としてある。たとへば世間には、同じ人であつても、豪膽な人と臆病な人とがあつて、臆病な人になれば、たいしたことでもない少しの怒りにふれても、おぢおそれて、逃げかくれるが、豪膽なものになれば、命をとられるやうなこはい敵でも、しかも少しでもにげかくれるならば、たやすくにげのべることも、少しも恐れず、ひとしがりもしないやうなものだこのやうに、人には眞偽の二類があつて、生れつき偽り性であつて、かざる心のあるものは、身の爲め要もない、すこしのことで、必ずいづはりがざるものである。之に反して、また、生れつきやうをいはいぬたちの人は、わづかのかざりごとを言つた爲めに、自分のために大いに益になることでも、身のためもかまはず、ありのまま、少しもかざる心がない。これ皆、その人にうけて生れたところである。その生れつきを云ふことのできぬ心のものが、往生しやうと思ふ心で、念佛に歸依したのならば、いかな

る所、いかなる人の前で念佛申しても、すこしもかざる心があるまいから、これみな眞實の念佛であつて、決定往生すべきである。どうしてこれまでをいましめやう。又生れつき偽り性であつて、世間のことにつけてはいくぶんうそいふこともあつたけれども、善知識にあつて發心し、往生したいと思ふ心が深くなれば、念々相續をしやうと思つて、いかなる所、いかなる人の前でも、何もおもはないで、一心に申しきりに申すところの念佛は、これまた眞實心の念佛であれば、決定往生すべきである。全く制すべきことではない。

「乍然、今いふところは、たゞ三心のなかに於て一心でも、かけては往生せないと、善導大師の釋してあるのだから、三心のなかのまご、ろそれが人ごとにおこしくいと云ふので、その眞實心を發すべきさまを云つたばかりである。だからと云つて、つねには念佛申すなどどうしです、めやうぞ」

と、仰せられた。その時、彼は又、

「先きほど仰せになつたやうに、夜念佛するときには必ず起きていて申すべきでせうか、また念珠や袈裟をにかけて申すべきでせうか」と申したれば、

上人

「念佛の行は行住坐臥ときをさらぬのだ。だから臥てゐやうと、起きてゐやうと、その時の心にまかせ、時にまかせて申せばよい。念珠をもつことも、袈裟をかけることも、また其の時の折りに従ふべきである。たゞ證するところはそんな威儀などはどうあらうとも、こんごこそは決定往生したいと思つて、かざらぬ心の念佛申すのがかんやうである」

と、教阿彌陀佛はこのことを聞いて、心から歡喜踊躍し、合掌禮拜して其の坐を起つた。

然に翌日、彼は法蓮房信空のところへいつて、暇ごいをしたが、その節、

「昨日、上人のお授け下さつた決定往生の義だ」と、申し出して、

教阿

「こんどの往生はすこしも疑はない」と喜んで東國に下向した。

其の後上人の御前で、法蓮房がこのことを申し出して、

法蓮

「さういふことがありましたか」と申したれば、

上人

「そのとだよ、さるふる盗人と聞いていたのだから、わしが對機説法をしてやつた。ひとどうりは心得たやうだつたが」と、

教阿彌陀佛はその後、河村に下つて住まつてゐたが、やみついて命終の時にのみ、同行の人に

語つて云ふには、

「わしが往生は決定だ、これ深く上人のみ教へを信するからだ。往生のもやうを、きつと上人のもとに知らしてくれ」と、

かう遺言して、彼は正念のなかに、合掌みだるとなく、高聲念佛數十遍をとなへて、命終したと云ふのである。

同行の人が、その後上京して、遺言の次第をくはしく上人に申したれば、

上人

「よく心得たを見わたが、やつぱりさうであつたのか、あつぱつれなことだ」

と、仰せられた。(二、五、三) 於越後柏崎

病窓の便り

安 田 恢 順

之は快順師より私の閨妻へ贈つた御便りです、只今私も拜讀さして頂きまして、其の尊い御心に又しても泣かされました、道女の爲めにもご生勝手掲載させて頂きます。表題は私がつけました。(觀道附記)

拙僧儀今般病氣の爲め臥床の寸閑を得て先日念佛の聲の中よりフト御上人の事を思ひ浮べましたら何か書きて呈したき心組になりまして病窓の一句筆の走るがま、に走しらせ送呈候處早速御見舞状を忝ふし一讀泣ひて讀みました又一讀泣きました汲めどもつくせぬ御慈悲の筆先何度讀めども慈悲の深心あく事なきより三度目讀み下せし時又々泣かずに居られませなんだ、私は四十三才此歳に到る、かゝる尊き尊書を蒙りし事未だ一度も覺へ申さず實に有難き次第なりと兩三日前行基寺上人御見舞に御光來ありし節御見せ申せし事にて

候
然るに今日は亦如何なる事にや思ひも依らず慈書に接し加之御心盡しの軽快なる便衣御惠贈を忝ふし重ねの深慈の程涙泣止め度を不知、時を移し候早速着さして頂きました處、誠に心持よく感せられ今後、夜と午前中着用させて頂く心組に候午後は暑さに單襦袢とお腰とのみにて臥床の有様に候、何分一月以來布圍は一度も着臥せし事無之次第、御惠贈の御心配千萬厚く、御禮申上候後日再會の期あらば幸甚の至りと喜び居候此頃は筆を取るにも少し永くとり得る様に相成候處未だ腦隨明らかならぬ故、途中何を書いて居るやらわからの事どもにて御讀み悪く候ならんも御判讀願上候、誠に御念佛は稱へにくいものに候、眞にか程までに煩惱に因縁深き私なる事よ、一方

如來様は十方衆生の此機類の者を見をなはせられたの發願なりと承る然も一切の善一切の功德を念佛に込めて一聲も皆往生をと既に成佛なされて方便攝取の御尊體と聞くに尊く候、私、臥床以來五ヶ月、草木も枯る、候なりしに芽を出す葉を出す幹となり枝となり花を開いてや散るあの木もある葉もあの通りなるに此病、何故あまり變化なきやと愚痴が出る、然し如來、因位にて兆載億劫の御精進たへまもなかりしと其れは衆生救済のためなりと！何んと云ふ強くそうして温たかき事よ私には人様より御勧めは頂きますが何んだかあまり進んで申す氣になれません、只この申されぬ私は

申されぬ中より縁に觸れ時に依つて申すより外なしとして居ます、何んとなさけなき私よ、されど如來様は念佛衆生攝取不捨と何んと尊い事ではありませぬか。應稱即現あ、如來誓願の不可思議、名体不離、何んと大なる包含ではあることよ。嗚呼、世は一切無常で進化する此私の身と心、如處までのびて行くでせう、のびてゆく念佛、のばされてゆく念佛、如來無量壽光の其の中に！オ、この尊き温き慈光を以て一切に接したまふ御上人よ！御令闡！願くばいやが上にも時にふれ縁に應じて今後とも御指導を仰き奉る 南無阿彌陀佛

眞生の喜び (二)

鑄工 小 熊 啓 太 郎

▼吾朋便り

▼越後 佐藤益章様より

御上人様にはその後も引續き毎日の御活動にて嘸ぞかし御疲れの事を存じ上げます、その上、近頃の暑さなどにて御變りもなきやなど御案じ申して居ります、その後は家族一同元氣にて慈光裡中に精進させて頂いて居りまし

△ 虚 飾 ▼

談話に心に考へに、感じに兎角虚飾のかげのさす事を恥ぢる。虚飾が見ゆる、かざりをとる事だ。いつに成つたらそれが自分から

根をなくするか。一心にやることだ。決して人の虚飾を心だけで
もあざけるな。嘲けり笑つてゐる、自分はごうだ。まだごまかし
があるではないか、正直らしい嘘をまだうつかり云つてゐるでは
ないか。そんな人間が自分ではないか。浅ましき者よ、愚なる者
よ、本當に一生懸命にやらう。いくらやつてもいい、もつとく
かざりをとつて假面をぬいで、無手だ。もつと素手だ。裸だ。身
一つで防ぎ。ぶつかれ。そこにこそ眞實があり。落ちついた本當
の姿がはつきりして来る。

かざりかきぬるおのがみにくさ 冠子

かざりかきぬるおのがみにくさ 冠子

中野先生に戴いた、このお歌に對して深く慙愧に堪わぬ。

△ 雀 ▽

心が落ちついて静かだと、雀の動作の面白さはつきり見わてく
る。チウ／＼と、つぶらな顔で、私の心に話し掛ける雀の心が感
じられる。ホントに可憐なものだ。

あの憎らしかつた。やかましい。むしろ邪魔者の雀——が今では
私にとつて無くてならぬいとほしい友達である。

私の心に雀に對する愛の満ちる時、始めて、友達の——相手——

雀の心がグン／＼強い力で、ところがやつてくる。生きた温い
ものが通ふ。生きたものに愛を感じる。

ジツト見てゐると、コゲ茶の頭をチョコナンと傾けて、話し掛け
る。庭に米を撒くと覗き乍ら、啄む、可憐な自然の儘の姿——
ある大雪の朝、戸を操る時、戸袋の影に、その友達が膨れて、キ
ョト／＼してゐた。

雀の生活に、大雪——饑——寒氣といふ自然の世界に對して、戸
袋といふ。保護——恵み、そして膨れ乍ら私の起きて、米を撒く
のを待つ雀の姿——何といふ有難い宇宙の大調和であらう。莊嚴
な世界であらう。

雀の姿——それは自己自身の姿だつたのだ。と思ふ刹那、私の心
は或る敬虔なものでいつぱいになつた。そして合掌した。

戸袋に雀 膨るる吹雪かな

その後この友達を詠んだ俳句は、幾つかの句と共に東京の新聞に
當選された。

△ 仕 事 ▽

私が工場で仕事をしてゐると、よく人が「根氣仕事の緻密な難か
しい仕事を終日よく續くネ、出来難い事だ」とさも感に堪わぬ様
に云ふ。

今迄の私は、こんな時、腹の中では「ホントな馬鹿／＼しいこん
な仕事、つまらない。こんな仕事は、全く命縮めで、命を刻々に
削つて行くんだ」と考へ。口では「他に好い職業ありませんか

て、全く従前になき温さに浸りつ、一同本當
に計ひなき仕事振りになりつ、ある事を思ひ
まして、此の次に御出で、頂くときには、相
當に變つて居らる、事に、御喜びが願はる、
であらうと思ひまして、私にも何さなく嬉し
さにぞく／＼するほどです。

こうした世界が私の眼の前に展開して來たの
を見るとき、私には始めて、身も心もなげ出
して一切に對する事の出來得た事を体験して
來ました、この事柄はやはり以前は一つの概
念にとまつてゐたのであつたが今度こそは
ほんものになり得たことを痛切に味はつて居
ります、やはり私も戸主といふ嫌な権力など
の冷やかさから脱して、愛の中から家庭に仕
事をさせて頂いて居る私であり、家族一同を
預つて居る私である事こそ、本當に身も心も
なげ出した私であつたと思ひました、
この事柄が家庭外に於てももつと、深刻に一
つ一つ根強く、青く上げたいと念じて居りま
す、

七月の唐澤山には、家族連れで三四人しても
つばら修養させて頂く事にして居ります、
村の青年諸君其他に於ても慈光に目さめつ、
あるのを見ます、本當に共々精させて頂く進

なければならぬと、私も又外でもそう念じて
居るのでありまして、そろ／＼そんな糸口も
見えて來まして、御上人様にも御喜び下さい
ます様御願ひ致します、どうぞ向暑、奥様は
じめ御子供衆共に御健康であらせられます様
御祈り致します、宅でも母をはじめ一同より
よろしく申して居りました、合掌

全 佐藤はじめ
全 かつ子
全 宏様より

お上人様のお蔭を持ちまして私共母子は全く
以前と打つて變つた明い世界に出していたゞ
きました、心は靜かに春の日を浴びて言ひ知
れぬ希望に満ちた暖い思念の泉が湧いて來ま
した、かつて経験したことのない平和のすが
たを我が家の中に見え出しまして何とも言ひ
ぬ喜びに満されました、私共は皆感謝に満ち
満ちてゐます。

一刻も早く兄弟二人もこの道に入れさせてい
たゞきたいと思ひます、今年の唐澤山のお別
時には互に手に手をさつて御厄介に上り度い
積りでゐます。

▼ 佐屋村 黒宮平八様より
別して御變りも御座りませす御法悦と御慶び
いたします、當方も御かけ様で一同無事で悦

ら、仕方なしにやつてゐます」と、捨鉢的に答へたものだ。
ところが、眞生の道を少しでも解らして戴いてから前述の質問に對しては、心から力強い言葉で即座に。

「い、本當に恵まれた、結構な職業です。他から見ても苦しい努力であり、勞働である仕事の中に私は、内面的の不斷の喜びと、平安を感じてゐます。

私の歩んでゐる道は決して努力でなく、歡喜であり、勉勵でなく、快樂です」

と答へると、同時に感激に胸がワクワクして腹の中から力強い喜びがこみがけて来る。(終)

大垣 桑原よし子様より

今日こそは六字の繩にからめられ
自由にならぬ心嬉しき
包まんと思へど出つる念佛の
今日は誰にも恥じるこなし
親様と知る上からの嬉しさは
何につけても樂しかるらん
来る年もまた来る年も南無阿彌陀佛
六字の中に寝たり起きたり

になつてはあません、漸くヤケな気分からは脱し、いつもく光明をみつめてゐます光なくしては寸時も生きれない私になつてきました、これは丁度耳四郎の念佛そのまゝであります。

▼名古屋 永田貞雄様より
眞生居士屋上人の耳四郎の念佛拜讀誠に難有念佛を唱へながら三苦は消滅どころか増々募るの感があり慚愧に不堪候合掌南無阿彌陀佛
〜 將來幾重にも御指導懇願奉り候

▼柏崎 原吉郎様より
春來屢々御巡錫下さいまして洵に難有う御座いました厚く御禮申上ます、御座様にて當地方も近來日増しに青年諸君の共鳴を得、各自

□東京 觀道より

愈々七月となりました、今年は例年よりも雨が少いので農家の田植も如何かと心配です。各地の道友の方々には其後御變りも在りませぬか。暫く御目にもか、らず、又御使りも頂かぬ方々には一層案

熱心に念佛精進せらる、体度は一般社會に大なる刺撃を興へ世人の注意を喚起しつゝ、あるは誠に喜びし次第であります、同時に道友互に責任の重加を思ひ各々誠慎して居りますから此儀は御安慮の程を願ひます、本郡小田郷方面も山岸、木原の両君中々の熱心にて次回御來越の際は是非共御参練の上せめて二三日丈なり共御巡錫願へたし只今よりの申込みであります。

▼見附町 今井善吉様より
此度の當地大火災の際は早速電報にて御配慮下さいまして厚く御禮申上ります。何しろ私は消防組幹部を勤めて居りますから復興策に日も之足らざる様な大忙であります。

じられてなりません。

それにつけても、近頃の北越行きは近來にない道友の激増でした神戸、名古屋、三河、大垣方面もかなりの盛會を見るやうですが、焼津の集りもかなりの賑しさを感じます。それに大阪の光明が近頃

ばせて頂いて居りますから御放心下さいませそれにこの節も御存知の長野の求道の青年も居られます事さて、牛に引かれての相は御恥しい事ですが、一層の念佛精進をさせて頂いて居りますから御安心下さいませ、瀧澤も崇徳寺より引き續き不快勝ちでは居りますがこれ又たいした事も御座いません、明日にも全快に存じます、

▼清水 中村辨康様より
唐澤へは二三年参りませんから参りつてもよいと思ひます。唯だ黙まつて御念佛させて頂きさへすれば……。

此處迄書いてある「眞生」六月號が到着しました。「蛙の臍」「耳四郎の念佛」「病窓」皆んな生き／＼した記事で滿ちて居ました。ここに「病窓より」の一文には何となく尊い感じがしました。苦さ戦ふいさましき勇者！そこに生き／＼した尊さが人を引きつけるのではないかしらと思ひました。

▼静岡 法月光二様より
耳四郎の念佛を拜讀致しました、私の爲めに態々御かき下さつたかとおもはれるほど難有拜見致しました。例に依つて例の如く凡々たる生活をおくつてゐますが、私は決してヤケ

す、此大火災に直面して益々我身は如來の慈光に包まれて居る事を喜はずには居られませんが、あの急場の中に心は悠々念佛を念じ消防に全力を注ぎ得た事。

當時の私の頭には消防の外家の事親類の事なご少しも心に掛りませんでした。家では幸か不幸か父も母も外出中にて不在でした愚妻と弟と店員丈でした。然るに皆々両親否我が家を明けて居るにか、はらず長く落付いて家を處理し目の廻る様な大忙の中を極めてウロタヘル事も無く働きた得たのも皆如來の御慈悲と家内一同喜び居ります、私の家始め新宅及親類は何等被害がありませんでした。

各地に認められて來たのと、朝鮮に山口常照師が眞生同盟を發刊せらる、やうになられたのは私共の衷心から喜びとする所です。

今度岐阜と清水にも久々でお寄りしましたが岐阜の方では集りの人数は少いが其の熱心の道友は昔

に變らぬ親密さは筆紙に盡せぬ喜びでした。清水の集りも温かい中村上人に兄弟のやうにして接するのと鈴與の奥様や久我尾様佐々木様などのなつかしさと集る道友の案外にも多いのには心から謂知れぬなつかしさを覺えずには居られませんでした。

此の夏は七八月にかけて唐澤の御別時以外、どこにも傳道には出ぬ。ことにしてゐます。せめて此の間なりともゆつくりと私の勉學に資したいと望んでゐますが、果して豫期したほどの勉強ができませんや否とにかくできるだけはやるつもりでゐます。

今年の唐澤は七月二十八日から七日間と云ふことになりましたが、集る人も可なりに多いかに見ゆる

ので、收容しきれるかと案じてゐます。つきましては其の間初めての方もあり、また度重なる人も多いことでありませうが、今年こそは心靜に念佛もし、又萬事につい

唐澤別時三昧會案内

一、七月二十八日より八月三日まで七日間

一、前日午后五時頃までに上諏訪驛前の旅館に待合せます

て今少しく厳しくにもやりたいものです。願くば登山の方々も其の氣分で御集りのほどを願つておきます。然し例年の通り心からなる

道友の集りのことなれば心ゆくまでと打けた、喜びの集りであつてほしいことは勿論です。(七、五)

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土屋 觀道

名古屋市東區東外堀町二ノ二

印刷人 佐藤 忠義

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞生 社

(大正十四年八月十三日
第三種郵便物認可)

昭和二年七月十二日印刷
昭和二年七月十五日發行

本納刷 (毎月一回十二日發行) 第六卷第六號